

井上円了の国内旅行記録における 時期的変化と地域観察

小池辰典

koike tatsunori

はじめに

東洋大学の学祖である井上円了は、哲学・仏教・妖怪学などの研究者として名高だけでなく、欧州やアメリカ・インド・オーストラリアなど世界各国を巡りつつ日本国内も限なく巡り、そのなかで人生の半分近くを旅の中で過ごしたという異色の経歴を持っている。そのため、旅とは円了を探る重要な要素といえるだろう。

旅という視角から円了を探る方法は、訪問先の新聞が円了をどのように評価したか(1)や日記の精読を通じて円了の人脈や動向などを確認すること(2)の他、円了の観光に対する向き合い方(3)にあたるなど多岐にわたる。そのなかで、本稿では国内の旅に注目する。

先行研究において先ず注目したいのが三浦節夫氏の指摘である。三浦氏は、円了は61年の生涯のうち27年間分を旅の中で過ごしたと指摘し、その旅を大きく2つの時期、すなわち哲学館(後に哲学館大学。現、東洋大学)などの教育機関を運営していた「前期」と、退職して哲学堂を拠点に修身教会という教育組織での活動を始めた「後期」に分けた。あわせて「前期」における国内の旅は、1890(明治23)年からの全国行脚と1900(明治33)年からの北陸・近畿巡りの2つの時期に細分でき、この2つの旅は教育機関を維持・発展させるための義援金募集という目的があったと指摘した(4)。

この「前期」「後期」に関し、堀雅通氏は国内の旅について「前期」中は「日程や行程、天候、面会者や訪問箇所等について、これらをごく簡潔・事務的に記した日誌」だが、「後期」は名所旧跡や訪問先の特徴に関する記述が格段に増えると指摘された(5)。海外旅行記を検討した瀧田夏樹氏も「前期」の『欧米各国政教日記』は「西欧宗教事情視察の「報告書」といってよいものであり、日録的ニュアンスは少しもない」と指摘し、「前期」から「後期」に移り変わる時期の『西航日録』は「旅日記としての面白さを十分にそなえた紀行文」であり、「後期」の『南半球五万哩』になると「旅中の円了の態度は、あくまでも自分の好奇心のありかに忠実で、機会を逃さず珍しい場所に足をのぼし、素直に感動する、だが決して物に執せず、自然にまかせる風が目立つ」と指摘した(6)。これらの指摘のように、日記の方向性が時期毎に変化している点は注目すべきであろう。

また、堀氏は「海外視察旅行では酒と温泉を観察的、比較文化論的に捉えていた」(7)と円了の地域観察について言及されており、あわせて、円了が東京大学予備門・東京大学に在籍していた頃に学友らと各地を巡った際のことをつづった『漫遊記』に関する考察のなかで次のように示唆している。

旅行記には見聞した各地の風俗・民俗の印象・所感が記される。国内外各地の見聞は自ら比較の視座を養う。円了は旅行を通して諸国の地理・人情・物産等に通ずることとなった。それは後年『妖怪学講義』『日本周遊奇談』といった著作に結実していった。(8)

このように、円了は旅のなかで各地域を観察し、知見を深めていったという点は重要であり、こういった行動がいつ頃から明確になってくるのかという視角が必要になってくる。

以上を踏まえて本稿では、円了に対する理解を深めるべく、円了はいつ頃から、何を意図して、国内の地域観察を行ったかを探る。それにあ

たり、一章では「前期」の特色を探り、二章では「後期」の特色について探りながら、地域観察の目的についても検討する。

○補足：国内旅行の記録

東洋大学の井上円了記念学術センター編である『井上円了選集』（以後『選集』とする）12—15巻（樺太といった一部地域が未収録だが、漢詩の訳が掲載されている）に以下が収録されており、これを用いる。

- ・『館主巡回日記』…『選集』における仮題。

1890（明治23）年—1906（明治39）年

- ・『南船北馬集』…円了自身が刊行。

1906（明治39）年—1919（大正8）年

第1章、『館主巡回日記』について

『館主巡回日記』とは「前期」の国内旅行の記録をまとめたものであり、当該期の旅は先述の通り、三浦節夫氏が2つの時期に区分した。それは1890（明治23）年からの全国行脚と1900（明治33）年からの北陸・近畿巡りである。

また、国内の旅の記録が殆ど残っていない時期があり、これら3つの時期を検討する。これらの時期について、特別の記載がない限り『選集』12巻から引用しており逐次記載しない。また、当該期の主な媒体である『哲学館講義録』の巻数も逐次記載しない。

1-1, 1890（明治23）年—1893（明治26）年の記録

上記の時期に円了が長期の旅を行った理由について三浦節夫氏は、明治22年、円了は完成間近であった新校舎が暴風雨で倒壊するという事態に直面したことを受け、勝海舟に資金面について相談し、その結果、義援金募集の全国行脚を着想し、翌年から実行したと指摘した⁽⁹⁾。

円了が最初に向かったのは静岡県であり、出野尚紀氏の解析によれば、義援金募集は思ったように進まなかったが、「寄附金額に応じて勝の揮毫を贈るといふ、勝のアドヴァイスにそのまま従っている」ことや、出立前に『静岡大務新聞』で広告を出すといった工夫を行うなど、後年の寄附金募集に繋がっていく部分がみえること、また、教育関係者と盛んに接触している点も注目すべきだと指摘した(10)。

その静岡県行きについて、日記冒頭部分を載せる。

《史料1》「静岡県」1890(明治23)年11月2日～同7日条

明治二十三年十一月二日 晴れ。朝九時、新橋発車。大磯町教育会に出席し、教育上の講話をなせり。

同三日 晴れ。大磯町松林館に滞在。

同四日 晴れ。大磯発車。十二時、静岡着。大東館に止宿す。午後、左の諸氏を訪問す。

時任知事、村田書記官、徳川家家扶小栗尚三、師範学校長蜂屋定憲、中学校長杉原正市、県官学務課長佐藤保祐、師範学校教頭土方勝一、徳川家医師柏原学而、医師伴野秀学、貴族院議員宮崎総吾、大務新聞主筆鶴田某、暁鐘新報持ち主前島豊太郎、県会議員板倉甫十郎、曹洞宗洞慶院、浄土宗宝台院。

同五日 雨。朝、県庁へ出頭し、知事、書記官、参事官、学務課長等に面会す。午後、蜂屋師範学校長の依頼に応じ同校へ出頭し、教育将来の方針ならびに哲学館拡張の趣意を演述す。聴衆は県官、教員、生徒なり。その夜、南荘乗海、森本大太郎二氏、その他二、三の有志の依頼に応じ、市中敬覚寺において学術上の演説をなす。当日、市長星野鉄太郎氏を訪問す。

同六日 晴れ。午前、銀行頭取小林年保を訪問す。その他、野崎彦左衛門、井上彦左衛門、吉川宜英、菊池清隠等の諸氏を訪問すべきはずのところ、そのいとまを得ず。当日来訪にあずかり初めて面

会したる諸氏は、前田五門、近藤壮吉、滝川勳二等なり。

同七日 晴れ。早朝、資本募集方法につき知事、書記官を訪いて相はかり、帰路、蜂屋師範学校長をたずね義捐金募集の件を依頼す。南荘乗海氏にも奔走を囑託す。午後、静岡を去り、焼津停車場に降車し、小川小学校において教育上の講演をなす。当校ならびに近隣の学校教員数名に面会す。これよりまた上車、掛川町に至りて泊す。宿所吸月楼なり。当夜、良源寺において仏教演説会を開き、会后、懇親会あり。主唱者は左の二氏なり。

円満寺住職鬼頭廓竜、了源寺住職曾我得忍。

当夕、懇親会にて面接したるもの、左の諸氏なり。

警察署長松山某、警部佐藤某、山崎千三郎、泉覚愍、浅井天察。

その他会する者、町内の有志資産家数十名なり。

* (下線は筆者)

以上について、下線箇所は義援金募集に関連する箇所を強調したものであり、先述の三浦氏の指摘通り、資金調達に注力する姿がみえてくる。また、堀雅通氏が「簡潔・事務的」と指摘したことは先述の通りだが、まさに《史料1》は、講演場所と義援金募集に関係した人物、それに移動方法と宿所が淡々と記されているのみである。これは全国行脚の日記全般における執筆姿勢に共通した傾向となっている。

そして、《史料1》の静岡県行きに関する日記『静岡県』の末尾は「静岡県巡回中面会したる諸氏にして前文中に記載せざりしものを、名刺中よりその姓名を探り左に列記す」と書いた後、人名を列記する形で日記を終えている。あわせて次の史料も考察する。

《史料2》「九州」1893（明治26）年3月3日条

同三日 晴れ。十二時、松島善海氏の紹介によりて監獄署に至り、署長桜根幾太郎の依頼に応じて囚徒に向かい一言を述ぶ。午後および夜分、明蓮寺において公衆演説をなす。聴衆、満堂にあふる。

明蓮寺住職は鹿多正現氏なり。当地開会発起者は真宗東西両派法中にして、すなわち鹿多正現、村上喚道、松島善海、大江琢成、松岡善了、松本不染、本多諦信、橘観澄、細川速成、北条正念、小倉専信、印山法電、藤沢円琳、黒田松月、摂受真月諸氏なり。よって勧募の件もこの諸氏に依頼す。長岡讓氏も当地にありて大いに奔走せらる。

上記は、全国行脚の最後となる九州での日記である。この2日後に円了は船に乗って東京への帰途につき、全国行脚を終える。これも半分ほどが支援者名の列記に費やされている。この支援者に対する配慮を重視した記述が全国行脚時の傾向であり、義援金募集という円了の強い目的意識が確認できる。

さて、義援金関係以外の行動について、堀氏は「注意して読むと、巡講の最中、移動中、あるいは訪問地において、円了は、折に触れ、目にした風景や風物、あるいは名所・旧跡等の印象や所感を、さりげなく記している」と指摘して「前期」における観光行動を丹念に探り、列記している(11)。これを頼りに、場所や時期などを明示して考察を行う。

堀氏が「風景賛美」として分類したものについて、全国行脚のなかでは、1891(明治23)年6月10日、現在の島根県漣摩郡仁摩町大河内で講演を行う日の午前中「小舟に乗じて辛島(韓島)、麦島の奇景を巡見」(『島根県石見国浜田以東』)したとある。

また、「名所・旧跡・風物・景勝地」という分類では、1893(明治25)年12月31日に山口県で「午前、出でて鯨魚の解剖を見る。午後また捕鯨あり。その状、実に一大奇観たり」(『九州』)と捕鯨に対する感嘆を記している。しかし、それ以外では、1891(明治24)年2月14日に「朝、和歌浦を見物」(『滋賀県ならびに和歌山県』)と和歌山県の名所を眺めたことや、1892(明治25)年5月14日に新潟県で「如法寺天然ガス点火を一見」(『新潟県』)したこと、1894(明治26)年1月19日に福岡で「午

前、箱崎八幡宮に詣し、名島に渡り神功皇后三韓征討に用いたる船櫓の化石したるものを見る』(『九州』)等とあるように、感想も無く非常に素っ気ない。このように、全国行脚中の日記では、景観などに対する円了の所感がほとんど見えない。

但し、北海道・九州の2地域には、1893(明治25)年5月刊行の『天則』5編3号収録「北海道論」と翌年刊行の『天則』5編11号収録の「九州論」という報告書があり、その内容は教育・宗教事情・富国策が中心だが、地域色についても論評している。

円了は「北海道論」において、42日という短期間で巡ったため、表面的なことから推察すると述べつつ、世間では、政治・植民・開墾・実業・有形から論じたものばかりで、風俗・人情・宗教・徳義・無形から論じたものは極めて少ないと指摘し、「一国一家を富強にする法は、無形上の徳義をもって基本」とする必要があると説き、当時の北海道は、新規開発地にありがちな浮ついた雰囲気が無い点に驚きつつも、それを継続させるため、教育及び仏教などに力を入れることが必要だと説いている。

また、「北海道論」が刊行される3年前の1889(明治22)年6月頃、地理学者の志賀重昂が『南洋時事附録』(12)を刊行し、その第1章の「北海道を如何に開拓して最も多く利益を見る可き乎」で、鮭漁が盛んだが農業も推進すべきだと論じた。或いは、円了は志賀の著作を意識したのかもしれない。

「九州論」は、全体の4分の3ほどが宗教事情や富国策ではあるが、残り、3つの「予想外」と「通則外」(通常とは異なるさま)をあげている。「予想外の第一は、余、初めに九州は暖国にして寒中といえどもすこぶる温和なるべしと思ひしに、案外に寒気強く数回降雪に会せり」で、2番目は、九州は山国と推測していたが思ひのほか平地が多かったというものであり、3番目は「九州は明治の文明の早く開けたる地」なので、民間でも新暦を用いていると思っていたのに、他地域に比べ、旧暦を使っ

ていたという点であった。

「通則外」は、九州は日本でも「気候温和」で海に接する場所が多く風景に富み、「文明も本邦中最も早く開けたる地」なので、そのような場所は一般的に人情軽薄で、行動も軽拳で虚飾を好むはずなのに「第一に、九州は人情一般に質朴にしてかえって着実を好み、むしろ保守の風あるがごとし」「第二に、九州は意外に儉約を重んじ虚飾を喜ばざる風あるを見る」「第三に、かくのごとき気候風景の地に生長するものは美術の天才に富むべき道理なるに、九州人はかえってその才に乏しきを見る」と記し、これらを自分が「あやしみしところ」だと記している。

以上について、特に「九州論」が興味深い。円了は日本国内において、現地を実際に訪ねることで、自身の獲得してきた知識と実態の差異に直面するという経験を積んだのである。

1-2, 1900 (明治 33) 年—1902 (明治 35) 年の記録

この時期について三浦氏は、教育機関の拡張計画に着手し始めた直後に火災で校舎を失ったことで、再び義援金募集の旅に向かったと指摘している(13)。

この時期に巡った場所と報告書の有無を図表にしたので、そちらを参照されたい。

訪問先は北陸と近畿であり、日記には「報告」という名称が多く用いられている。また、能登半島と和歌山・奈良南部・三重の志摩方面については「能州巡回報告演説」「南紀巡回報告演説」という名称の報告書がそれぞれ付随する。

まずは、報告書がない日記の初回となる 1901 (明治 34) 年開始の富山県行きについて、冒頭部分を載せる。

《史料 3》「富山県巡回日記」『加越及播丹巡回略報告』1901 (明治 34) 年 6 月 23 日～同 29 日条

図表：哲学館拡張における義援金集めの訪問先

地域	明治	出発	帰宅	収録	報告書
石川：能登	33	7.18	9.2	能州各地巡回略報告	○
和歌山	33	11.17	12.31	紀州南部各地巡回報告 付 勢州度会及志州	○
三重：志摩方面					
奈良：南部					
三重	34	2.18	3.19	南紀および南勢巡回日記	
富山	34	6.23	9.12	加越及播丹巡回略報告	
兵庫	35	2.13	3.26	加越及播丹巡回略報告	
石川：加賀	35	4.6	6.1	加越及播丹巡回略報告	
兵庫					
福井	35	6.19	9.3	加越及播丹巡回略報告	

明治三十四年六月二十三日 晴れ。朝、上野発車。夕、直江津より乗船、夜十一時、西頸城郡糸魚川着。早川屋に投宿す。

六月二十四日 晴れ。朝、糸魚川より下根知村字根小屋広伝寺に移りて開会す。発起者は宿寺および勝蓮寺住職なり。

同二十五日 晴れ。同所滞在。

二十六日 晴れ。朝、根小屋を発し、親不知の新道をこえ越中の国境に入る。海上の風景すこぶる佳なり。途上、本館出身者伊東順二氏の出でて迎うるに会す。午後一時、下新川郡泊町に着す。宿所大安寺なり。伊東氏これに住す。本郡長藤井務氏来訪あり。

同二十七日 雨。午前午後ともに開会す。教育会および有志諸氏の依頼に応ずるなり。

同二十八日 雨。午前、横山村字春日明栄寺に移る。住職高桜諦観氏等の発起なり。

同二十九日 晴れ。午前、入善町に移り、午後、小学校にて開会

す。教育会の依頼なり。当夕、梶山村長嶋武右衛門氏の宅に宿す。同氏は教育熱心家をもってその名世間に聞こゆ。庭内大いに風致あり。*（下線は筆者）

以上について、下線部の通り、僅か1週間の内に2回も円了が景観への所感を記している点が興味深い。数日後の7月3日条でも「黒部川の眺望絶佳なり」と所感を表している。これは、富山県行きの8年前に終えた全国行脚と比べて大きな変化といえるだろう。

また、全国行脚では《史料2》のように、義援金募集の支援者名を列記することに気を配っていた。それに対し、北陸・近畿巡りは《史料3》27日条の「教育会および有志諸氏」のように、義援金募集の人名記載が簡略になっていく傾向にある。この点も大きな変化と考えられるだろう。

さて、「報告演説」と題する報告書について、初回の能登半島のものにあたる。

《史料4》『能州各地巡回略報告』『能州巡回報告演説』1900（明治33）年9月刊行

論語を読みて論語を知らざるものあり、北国に生まれて北国を知らざるものあり、余はすなわち北国に生まれて北国知らずの一人なり。北国第一の高山たる白山も、第一の大都たる金沢も、ともに余のいまだ接見せざりし所なり。元来余は越後に生まれ、幼にして謙信の詩を誦せり。けだし越後の名は謙信とともに高く、謙信の名はその詩とともに伝わる。しかしてその第三句に「越山併得能州景」とあるを読むごとに、能州の風景の殊絶ならんことを想像し、ひとたびその地に遊ばんと欲するや久しかりしが、今日までその志を果たすを得ざりき。しかるに因縁ようやくここに熟し、本年暑中休暇四十日間をもって能州一円四郡を巡回することとなりぬ。

^② 今度の巡回は文人的漫遊にあらず、保養的旅行にあらず、哲学館および京北中学校拡張の旨趣を報告し広く賛成会員を募集するにあ

り。滞在の日は四十三日間にして、開会の場所は四十二カ所なるも、賛成者の多くしてその結果の良好なるは、従来他にいまだその比を見ざるところなり。これ全く発起諸氏の奔走尽力の至れるによるといえども、また能州人士の義拳心に富める一端を知るに足る。余の至る所、あるいは煙火をあげて祝するあり、あるいは緑門を造りて迎うるありて、実に過分の優待歓迎に接せり。ただ余はその厚意を謝するに言語なく、その懇志に報ゆる方法なきに苦しむのみ。もしその万一に報答せんと欲せば、余が巡回中の所感を記して能州将来の繁盛を祈るより外なかるべし。

^③能州に遊びて帰るものはみな日く、風景よし、空気よし、人気よしと。余、またこの地に入りてたちまちその言の真なるを知る。けだし能州の風景の魁たるものは珠洲の九十九湾なり。これ松島の勝、耶馬溪の奇と相伍するものなれば、その名勝たるや余が紹介を待たざるなり。石動山上の眺望のよく謙信をして能州の景を歌わしめたるも、またみな人の知るところなれば、余が喋々を要せざるなり。ただ余は巡回中に別に^④七不思議および八景と名づくべきものを得たれば、他日の笑い草までに左に掲ぐ。

能州巡回中の七不思議

- (一) 灘の人車鉄道（注していう、灘村にては石材運搬のため数里の間レールの布設あり。このレールに轎を載せ後ろよりこれを押す、運転すこぶる軽し。これすなわち一種の人車鉄道なり。）
- (二) 小木法融寺の蘭弗（題していう、「不許蘭弗入山門」。）
- (三) 兜の蚊（兜は蚊太と音相通ず。名実相応の一奇なり。）
- (四) 馬渡浄楽寺の山門（浄楽寺山門なし。住職曰く、寺をへだつること数丁、本村に入る所、巨石深淵左右相対するの天険あり、これを浄楽寺の山門となすと。余曰く、浄楽寺は山門な

きをもって山門となす。禅宗の無門関に似たり、よろしく法融寺の蘭弗と好対の奇となすべし。)

(五) 大町の人造雨 (大ポンプにて水を空中に散じ雨のごとく地を湿さしめ、もって人をして炎暑を忘れしむ。これ、よろしく人造雨と名づくべし。)

(六) 徳田照明寺の大硯 (長さ一尺八寸、幅一尺二寸。)

(七) 免田、西氏庭内の石籠 (大小十二基、おのおのその形を異にす。)

以上の七種は余が日本全国六十カ国、八百数十カ所の巡回中、いまだかつて見聞せざりしものなれば、これを能州の七不思議とす。

能州巡回中の八景

(一) 七尾の汽笛 (二) 中居の隧道 (三) 珠洲の塩田

(四) 南志見の盆踊り (五) 輪島の明月 (六) 七浦の断巖

(七) 鉦打の驟雨 (八) 高浜の炎暑

以上は余が能州巡回中経験せる七奇八景なり (後略)

* (下線は筆者)

上記は、冒頭部分から載せており、全体の中では5分の1ほどの分量である。残りは円了が元々関心の深い宗教に関する記述となっている。

冒頭をみると、新潟生まれの円了は上杉謙信について幼少より知っており、その詩に能登半島を詠ったものがあるので、下線部①のように詩に詠われる風景の素晴らしさを想像し、以前から一度は訪ねてみたいと思いつつも果たせざりしたが、休暇が出来たので向かうと記している。しかし、直後の下線部②で、今回の旅は文人としての観光でも保養目的でもなく、教育機関の拡張を目指したものだとして記しており、義援金募集が大きな目的であることが再確認できる。

それでも風景に対する思いは強く、下線部③のように宮城県の松島や大分県の耶馬溪といった名所を引き合いに出しながら九十九湾の素晴ら

しさを語りつつ、そのような有名な場所は自分が紹介するまではないと
いって、傍線部④の通り、自身選抜の「七不思議」（七奇）「八景」をあ
げると記した。この七奇・八景は「後期」の『南船北馬集』でも散見さ
れる。

八景とは、名高い瀟湘八景にあやかって日本でも各地で付けられたも
のだが、円了も強い関心をもち、塩田や隧道（トンネルのこと）など記
憶に残った風景を記しており、「後期」日記中でも散見されるのは前述の
通りである。円了の八景に対する関心の深さは、出野尚紀氏の指摘⁽¹⁴⁾
があるので、詳しくはそちらを参照されたい。

七不思議では（五）の大型ポンプの散水による暑気払いや（六）の大
きな硯といった珍しいものをあげており、色々と見学していたことがわ
かる。但し（四）に注目したい。報告書では現在の石川県鳳珠郡門前町
馬渡にある浄楽寺が、大岩を以て門の代わりとしていることを取り上げ
ているのだが、日記中では「同十九日 晴れ。午前、阿岸より仁岸村字
馬渡に移る。炎暑ことにはなはだし。会場は浄楽寺にして、発起者は住
職藤浄慧氏なり。当寺藤善玩氏は旧館内員たり」（『能州巡回日記』1900
（明治33）年8月19日条・下線は筆者）と、全く山門について触れてい
ない。報告書では風景など地域の特色を取り上げるが、日記中では取り
上げないという傾向は、7年前の全国行脚時と共通している。

1-3、1904（明治37）年—1906（明治39）年の記録

北陸・近畿巡りでの義援金募集を終えた円了は、1902（明治35）年11
月15日から海外渡航を行い、翌年7月27日に帰国した（『西航日録』に
よる）。帰国翌年となる1904（明治37）年から、1年に1冊のみ『館主巡
回日記』には記録が収録されている。そのなかの最後の1冊『大和論』
は「後期」の『南船北馬集』『大和紀行』の報告書に相当するものであり、
日記は2冊のみとなる。

さて、この時期であるが円了が海外渡航に出た直後、哲学館事件が発生して、1902（明治35）年12月13日、教員免許の無試験検定の認可取り消しという事態に見舞われている。帰国した円了はこの対応に苦慮したことについて以下のように記している。

すなわち、1905（明治38）年4月から5月頃には「半日仕事をすれば半日眠息を要し、昼間わずかに業務に当たれば、夜間大いに疲労を覚ゆるありさま」であり「医師の診察を請い、そのときはじめて神経衰弱症なることを知ると同時に、哲学館大学長および京北中学校長は、しかるべき人に譲与して自ら退隠せんと志を起し」、一旦は漫遊旅行に出て疲れを癒やしたが、11月頃から再び悪化して12月には「庭前にて卒倒せんとしたること前後二回」となって遂に哲学館大学の学長・京北中学校の校長・京北幼稚園の園長を辞職するにいたる⁽¹⁵⁾。

ちなみに、円了は辞職までに哲学館を正式に大学とし、名称を哲学館から哲学館大学に改称した。そして円了の辞職を受け、哲学館大学は東洋大学と改称された。この時期の日記は「後期」から活動を本格化させる修身教会に関するものと上述の「静養記」の2点となる。まずは、円了が体調不調の甚だしさを訴える前年、修身教会に関する記録にあたる。

《史料5》「甲州巡回記」『修身教会雑誌』2、1904年（明治37）

明治三十七年一月十五日、朝。東京出発。午後二時、甲府着。旅館は魚町松亭なり。当夜、瑞泉寺において茶話会あり。

同十六日。午後、桜座において開会。

同十七日。普通学校において講演。最初、甲府市開会発起者総代として本館へ申し込まれたるは、三輪謙光、西尾俊崑、室住賢竜、柴田顛秀、前田定運等の諸氏なり。

（中略）

同三十日。北都留郡大原村猿橋にて開会す。北都留仏教有志会の発起なり。

同三十一日。帰京。

上記は、全国行脚時の執筆方針に戻っただけのようにみえるが、末尾をみると単に「帰京」とのみある。全国行脚の頃は「晴れ。相州大磯に休憩し、再び汽車に乗じて当夜十時、東京着」（「島根県石見国浜田以西」1891（明治24）年6月19日条）とあることと比べれば、天候・移動手段・帰還時刻など、多くの情報が抜け落ちている。加えて、《史料5》として載せた部分だけで、この記録全体の2割ほどであり、これほど短く情報の少ない記録は他にない。円了の強い疲労が感じ取れる。

次いで、1905（明治38）年7月16日から8月4日までの行動をつづった『関西紀行』（『修身教会雑誌』第21号）が、先述の漫遊旅行であり、熱海や静岡県・山口県・佐賀県の唐津・有田・伊万里などを巡り、風景賛美や自身の心情に関する漢詩を多数詠った他、チベット探検家で哲学館（現、東洋大学）出身の能海寛が横死したとの報に接し、憐憫の情を詠った（もう一人のチベット探検家である卒業生の河口慧海は目標を達成した）。その後、帰宅後の話となる京北幼稚園の始業式出席や熊沢蕃山の墓詣について載せるなど、取り留めのない内容となっている。

また、円了は日露戦争終戦まで、好んだ旅についても軍備調達のための観光立国論を論じる⁽¹⁶⁾など、世相を強く意識していた。しかしながら、日露戦争の講話条約で世間が沸き立つなか意見を聞かれた際に円了は、興味は無いと述べつつ、自分にとっての関心は優れた才能の持ち主が育つことにある等と漢詩で返している。これは疲弊していた円了が、世相から離れ、己自身が特に強く願っていた部分を露わにしたのかもしれない。

小括

本章では「前期」の日記について考察した。旅は大きく2つの時期にわかれているが、共にその目的は教育機関の維持・拡張にあった。日記

の内容は全般的に紀行文というよりも業務日誌的で、寄附金集めの協力者や講演会場が細かく記されていたことを確認した。

特に、最初に行った1890(明治23)年—1893(明治26)年からの全国行脚は、開校間もない哲学館(現、東洋大学)の校舎が天災で倒壊したことによる経済的な危機のため、義援金を集めに奔走しており、学生時代から好んでいた旅(17)を楽しむといった姿は日記の中からはうかがいにくい。名所旧跡をみても感想を記さず、旅の終わり頃になって、大晦日にみた鯨の解体で僅かに感嘆を記すに留めている。この時期は、開校直後の資金難という局面のなか、義援金の出資者の存在を念頭において旅を楽しむことを強く抑止し、表出させないようにしていたともいえるだろう。

報告書のなかでは地域に関する所感も述べているが、宗教事情という自身の研究テーマと富国強兵という当時のスローガンにのっとりた見解が中心である。そのなかで、九州の風土が想像とは全く異なり、人の気質も想定と正反対であったことを「あやしみしところ」と記しているのが興味深い。この経験は後年の円了に影響を与えるものであったと考えられるため、詳しくは後述したい。

次いで、1900(明治33)年—1902(明治35)年の北陸・近畿巡りでは、日記中に風景への所感がところどころ表れ始める。報告書でも、円了自身の研究テーマである宗教に多くの紙幅を割くことは変わらないが、「後期」でも散見される七奇・八景を選定するなど地域の様子を眺める姿がみえてくる。但し、それは大型ポンプで暑気払いを行うことや「人車鉄道」(手押しの特ロッコのようなものか)など珍妙なものを記す形であり、旅を楽しんではいるが、なにがしかの強い目的意識のもとに地域を観察している訳ではない。

この旅に対する態度の変化は、前回の全国行脚の経験に加え、京北中学校を開校するなど教育機関の発展に力を注ぐという前向きな活動に従

事していることが大きいであろう。但し、その内容は引き続き事務的である。それは日記の呼称を「報告」等としているように、義援金募集の経過を“報告する”という意識があったためだと思われる。

そして、1904（明治37）年—1906（明治39）年は、哲学館事件という難問を前にして悲壮感すら漂うが、漫遊では、思い浮かぶまま漢詩で風景や心情を吟じるなど、仕事に関与しない円了の姿が垣間見える点が重要である。

第2章、『南船北馬集』について

『南船北馬集』は円了が1906（明治39）年—1919（大正8）年に修身教会から刊行したもので『選集』には遺稿の16巻も収録されている。この「後期」の日記の特色を「前期」と対比させつつ円了の地域観察に対する姿勢に着目しながら探っていく。

ちなみに『南船北馬集』の『選集』における収録巻だが、1編—3編は12巻、4編—8編は13巻、9編—12編は14巻、13編—16編は15巻であり、以後『選集』の巻数は逐次記さない。また、便宜上『南船北馬集』は『南北』と記す。

2-1、「後期」の記録について

『南北』1編の「緒言」には旅の目的として修身教育の普及をあげており、あわせて自作の漢詩を載せるとも宣言した。また、名称の南船北馬を『日本国語大辞典』で引くと「絶えず旅を続けること。各地にせわしく旅行すること」という意味がある。円了の旅に対する意欲的な姿勢が感じられる題名といえるだろう。

それは、「後期」の活動を始めてから6年後の1912（明治45・大正元）年4月に刊行した、前年度の収支に関する『明治四十四年度決算報告』（『南北』6編）に「退隠後、旅行を専門としての結果、心身ともに健康を

回復したれば、本年よりは退隠当時の素志に立ち戻り、読書、著作を本務とし、その傍ら従前のごとく地方巡回講演を継続する予定なれば、ここに知友諸氏に拝告す」とあるように、哲学館事件で疲弊した円了は「後期」当初、旅に注力することで英気を養っていたことがうかがえる。

そして、哲学館大学・京北中学校・京北幼稚園という教育機関から身を退いた円了が哲学堂を拠点に進めた修身教会という教育組織の活動は、欧米では日曜礼拝の際に牧師や神父から道徳的な話を聞くことになったもので、義務教育から離れた後も継続して道徳教育を受けられることが日本にとって重要であるという円了の教育者としての考えから行われたものである。それは「埼玉県巡講日誌第一回」『南北』7編の冒頭で「大正改元とともに従来の修身教会を国民道徳普及会と改称」と記している点からもうかがえる。詳しくは、朝倉輝一氏の指摘⁽¹⁸⁾などを参照いただきたい。

この哲学堂を拠点とした修身教会という教育組織の維持のため、円了は講演のかたわら活動費を集めることを継続しておこなっている。

そしてまた、堀雅通氏は「後期」の旅は「触れ合い」「学び」「遊び」という3つの要素からなる観光行動という面から捉えられるとして、円了は名所旧跡を愛でることなどで「遊び」を行いつつ、地域を知る「学び」も行っており、また、講演活動のなかで多くの人々と交流を重ね、交友を深めるなどの「触れ合い」があった点に注目されている。あわせて「大学経営の重圧から解放され、自由な身となった」ことが、観光行動の積極化に繋がったと指摘されている⁽¹⁹⁾。

2-2, 報告書の変化 ―活動費の運用と講演状況及び女性教育―

円了は修身教会（国民道徳普及会）での活動費用を講演活動で集める際、揮毫（字や絵をかくこと）などを行った。その用途に関しては、1910年の『明治四十三年度統計および報告』（『南北』5編）には「揮毫謝儀お

よび篤志寄付」をもとに、哲学堂の「敷地購入費」や「家屋、庭園工事費」「事務費」を捻出して「今後の計画として庭園の増置、四聖の銅像、図書館の準備」を考えているとあり、『明治四十四年度決算報告』（『南北』6編）では「梵鐘および什器購入費および技師へ謝儀」「堂舎および庭園修繕費」「贈呈書冊および規則書印刷代」「事務費および維持費」「南半球旅行費補助」に運用し、続く『大正元年度報告』（『南北』7編）では「塚地四十二坪購入代」「物字園建設費および各所修繕費」「贈呈書籍、報告書、規則書類印刷代」「事務費」に運用したと記している。

また、講演についての記録は、『三十九年度統計』（『南北』1編）といった年度毎の講演場所一覧の他、一県や複数地域を巡った際、以下のような簡略な一覧を、日記の末尾に付随させる形で収録するように変化していく。

《史料6》「宮崎県紀行」『南北』2編、1907（明治40）年5月7日条・末尾

宮崎県開会一覧表

市郡	町村	会場	演説	聴衆	主催
宮崎郡	宮崎町	高等女学校	二席	七百人	日州教育会
同	同	郡役所	二席	二百人	郡教育会

（中略）

西臼杵郡	高千穂村	小学校	二席	五百人	郡内有志
同	同	小学校	二席	三百人	婦人会

以上合計 八郡、九町、二十八カ村、九十八席、二万一千五百五人

上記は、開催地域・会場・講演回数・聴衆の人数・主催団体などが記されている。会場として「高等女学校」がみえる他、主催団体に「婦人会」がみえる。

この点は「前期」に遡るが、1891（明治24）年3月2日に現在の高知

県香美郡土佐山田町で「中学講堂において女子教育の必要を演ず。婦人会員の依頼に応ずるなり。続きで、婦人会員に対し一席の談話をなす」(「高知県」・下線は筆者)と、円了は女性教育に前向きであった。

「後期」でも、例えば1909(明治42)年6月10日、島根県出雲市今市町で「午前、女子師範学校において講話をなす。出席者は師範校生および高等女学生なり(中略)午後、高等小学において開演す(中略)夜に入り、寺院にて婦人会のために演述す。今市婦人会長は遠藤良子にして、仏教婦人会長は竹原ヤス子なり」とあるように、継続的に女性への教育を行い、また、女性団体から講演を求められる姿が確認できる。

2-3、日記の変化

「前期」の旅は、教育機関の維持・発展を目標とした義援金募集という目的があり、支援者のことを慮る面もあってであろうが、内容は講演場所や支援者が中心となっていた。また、景観を楽しむ姿を日記上に載せることについて意識的に避けていた節がある。これに対して「後期」の傾向を掴めるものとして以下をあげる。

《史料7》「関西漫遊日記」『南北』1編、1910(明治43)年11月6日・10日・13日条

明治四十三年十一月。たまたま二週間の間いとまを得たれば、伊勢参宮、京都参詣に上らんと欲し、妻とともに六日、夜行汽車にて西行す。

十日 雨。午前、摂州箕面公園に遊覧を試む。雷鳴あり。午後を過ぎてようやく晴るる。溪路横斜、老楓並列、紅葉三、四分に及ぶ。路きわまる所、飛瀑のかかるあり。ここに至る、およそ十五、六丁あるを覚ゆ。林間点々茶店散在す。その風致は天然の庭園なり。けだし観楓はこの地をもって第一とすべし(後略)

十一月十三日 晴れ。午前、郡教育会の依頼に応じて郡役所楼上

にて開演す。会長は森重毅氏、幹事は岸本勝蔵氏、佃正覚氏なり（後略） *（下線は筆者）

上記は、日記名称に「漫遊」とある観光旅行記である。6日条の下線部のように休暇が出来たので妻と共に旅に出たとあり、10日条のように「遊覧」の他、景観を楽しみつつ「観楓」（紅葉狩り）を行っている。

「前期」の報告書《史料4》では、休暇ができたので風景を愛でたいと記しながらも、目的は教育機関の維持・発展を目指した義援金募集だと記し、実際、日記中においても風景賛美が控えめであったのに対し、「後期」の《史料7》は観光を満喫するさまを前面に出している。ただ、13日条の傍線部のように、観光旅行中でも求められれば講演を行うさまからは、講演活動が円了の日常に組み込まれていたことがうかがえる。

また、休暇の観光旅行まで『南北』に載せたことも興味深い。まさに、先述の堀氏による「大学経営の重圧から解放され、自由な身となった」という指摘通りであり、そして更にいえば、円了は私的な部分も前面に出すようになった。「前期」と「後期」における円了の立場の変化が明瞭に出ている箇所ともいえるだろう。

円了の遊び心としては、大分県佐伯市で「番匠川を隔てて当面に一帯の臥峰あり、これを三十峰と称す。その形、タバコの葉のごとし。よって余は煙葉峰と名付く」（「大分県」『南北』2編、1907（明治40）年5月9日条・下線は筆者）と、変わった地形などに独自の名称をつける楽しみを見出し始めており、地域をゆっくりと観察する余裕が出てきたことがうかがえる。あわせて次も確認したい。

《史料8》「大和紀行」『南北』1編、1906（明治39）年4月25日条

二十五日 晴れ。朝、白屋を発し、迫および大滝に休憩し、蜻蛉滝を一見し、西川に至りて泊す。会場は徳蔵寺なり。西川をよみてニシッコというは奇なり。ニシカワの転訛なりと伝うるも解し難し。その隣区東川をウノカワという。

以上はみな川上村の区域なり。川上村は二十三大字より成り、その面積、長さ十二、三里、幅六里、十津川町に次ぐ大村なり。しかして戸数は千二百、人口は六千七百人、学校は尋常高等を合して十九校あり、村内の教育費は一万円以上に達するという。産業はただ林業あるのみ。衣食の供給はすべてこれを他村に仰ぐ。その村内を貫通せる一帯の溪流は吉野川の源流にして、兩岸の風光自然に武陵桃源の趣あり。

上記は、現在の奈良県吉野郡吉野町の村々で講演してまわった際の記録である。村の人口や産業の他、学校の運営状況や風景に対する所感が記されている。風景に対する所感はこれ以後も頻出しており、得意の漢詩で賛美することもあった。

また、報告書中のみならず、日記の中でも“産業”を取り上げるようになる。ただ、このような市町村ごとの産業情報が本格的に登場するのは「埼玉県巡講日誌第一回」『南北』7編の1912（大正元）年9月27日条で現在の秩父郡長瀬町について「産業は養蚕を専一とす」と記した頃からである。その間は、一県や複数地域を巡った際に載せる報告書（詳細は次節）で、その地域一帯の傾向を述べる形を採っている。

このように、より細かく地域の特色を探っていくように変化する姿がみえる部分である。また、市町村ごとの産業に注目する姿からは地域を細かく観察するようすがみえる。この点について、あわせて次も確認したい。

《史料9》「熊本県紀行（続）」『南北』3編、1908（明治41）年4月28日条

（前略）入浴中、肥後方言をもってつづりたる一作あり。

肥南何処試吟哦、数日山行気削多、幸浴靈泉与嘉潔、一丁傾酒一丁歌、

方言にて、気削とは疲労の意、興嘉とは好または快の意、潔とはは

なはだしきの意、一丁とは一回の意なり（後略）

*** 漢詩の訳『選集』収録**

肥後の南、いずこにか吟詠を試みようか、数日の山行は疲労することが多かった。幸いにしてこの靈妙な温泉につかって、はなはだ快く、ひとたび酒を傾け一首を吟じたのであった。

上記は、方言に言及する最初のものであり、切っ掛けは漢詩であった。この「熊本県紀行（続）」6月9日条の末尾にある報告書には「本県は一種の方言と一種の気風を有する地なり」とある。熊本県民は商人風というより士族風、士族風というより「漢学者風」と記しつつ、方言に関して「いさぎいー、そーにやー、おつけなりました、いたまぐりして、飲めや赤酒」と列記し、これは「余が聞き込みたる方言を排列せるまでにて、意味の貫通せるにあらず」と、意味はわからないが一先ず集めたと記されている。

この熊本の次は福岡に向かい、続けて佐賀に向かったが、その報告書が興味深い。

《史料10》「佐賀県紀行」『南北』3編、1908（明治41）年8月1日条・末尾

（前略）方言にいたりては熊本に似たるところあるも、熊本よりは解しやすし。ただし兄を呼びて「おばーさん」というがごときは、他府県において、いまだかつて聞かざるところなり。

ハイをナイ、兄をバーサン、アグラをば、イタマグリとは、佐賀の方言。

上記のように、円了は佐賀方言を蒐集してその意味を探り始めている。詩が呼び水となって方言への注目が始まったことは、漢詩好みの円了らしさが見えて面白い部分である。これ以後、方言も調査対象になっていく。

そして方言の蒐集を始めた翌年に「隠岐の俗謡ドッサリ歌」（「島根県

紀行第二、隠岐の部』『南北』4編、1909（明治42）年6月18日条）を記したことを皮切りに、円了は俗謡・方歌にも注目し始める。

特に、1910（明治43）年7月31日、現在の長野県木曾郡木祖村で「余が木曾俗謡を漢訳せる一詩あり」といって「俗曲由来吾所愛、方歌却好知民態、木曾御嶽夏猶寒、欲贈袷衣添足袋」を載せている。この漢詩の訳について『選集』には「俗謡はもともと私の好むところであって、その地方の歌はその地の民情を知るうえでかえってよくわかるのだ。その俗謡に『木曾の御嶽は夏でも寒い、あわせやりたや足袋添えて』とある」（下線は筆者）とある。そして、漢詩に続けて「その方歌は「木曾の御嶽夏でも寒い、袷衣やりたや足袋添へて」を訳したるなり」と、俗謡を方歌と言い換えつつ本来の俗謡を載せた。また俗謡の内容については「ひとり御嶽のみならず、藪原にも通ずる俗謡なり」との感想を述べている（「信濃国南部紀行」『南北』5編）。傍線部のような事例は他にもみえる。例えば、昔の飛騨国南部、現在の岐阜県益田郡から武儀郡への通過箇所である飛騨川沿いの中山七里について、「腕車を翻して中山七里を一貫す。この間、峽狭く水急にして渡船の便なく、往々懸索にて人を運ぶの設備あり。昔日は七里の間ほとんど人家なく寂寞たりし実況は、俗謡によりて推知するを得」（1910（明治43）年9月24日条「美濃国東部紀行」『南北』5編・下線は筆者）として、俗謡で地域の昔日の様子が確認できると記しているのである。

2-4, 報告書の変化 一地域観察と方言・俗謡一

地域毎の風土や気質などに対する所感は、「前期」では日記とは別に「九州論」や「能州巡回報告演説」という報告書の形で出していた。「後期」も初回の『大和紀行』では『大和論』という報告書を作製しているが、その次に向かった『足尾および長岡紀行』では報告書がなく、その次に向かった香川県から以下の文章が見え始める。

《史料11》「香川県紀行」『南北』1編、1906年(明治39)8月17日条・
末尾

香川県は地味、気候ともに佳良なれば、物産比較的に多く、人口また稠密に過ぐ。したがって労力の価高からず、一般の複産業としては麦わらサナダ織あり。宗教は真宗と真言宗最も多く、仏教の勢力盛んなり。また、宗教家と教育家とおのずから接近する傾向あり。民家の富裕なるものは居宅、庭園を美にする風あるも、夜具、蒲団は粗なるもの多し。郡部に入りては旅館の佳なるものなきは、旅行者の不便を感じるところなり。風景にいたりては大いに誇るべきものあり。余は屋島の勝をもって第一にかぞえんとす。そのつぎは琴平、そのつぎは観音寺、そのつぎは詫間、そのつぎは津田ならんか。奇勝においては寒霞溪あり、庭園としては栗林あり、ともに天下の名勝とするに足る。香川県の紀行を結ぶに当たりて、所見の一端を録することかくのごとし。

上記は、17日条で香川県から船で岡山に移動し、18日に長崎入りしたことを記した後、講演状況と開演の協力者への謝辞を記し、また自作の漢詩を披露した後で、段落を変えて掲載されている。上記のように「前期」では報告書として別個に作製されていた風土・産業・宗教事情といった地域の特色を「香川県の紀行を結ぶに当たりて、所見の一端を録する」とあるように日記末尾に載せるようになった。また、新たな情報として“産業”が登場していることも興味深い。次いで以下を確認したい。

《史料12》「長崎県紀行」『南北』1編、1906(明治39)年10月26日条・
末尾

対州は壱州と同じく、シナ、朝鮮の風に似たるところあるも、忠君愛国の義気に富めるは、清韓人と雲泥の差あり。宗教は祖先教というべく、祖先の靈位を崇重すること厚し。その地、高山峻嶺多く、したがって耕地に乏しく、米穀を産せず。故に民家は極めて粗食な

りという。甘薯を呼びて、孝行芋と名付くるは奇というべし。余は不幸にして滞在の時日を失い、村落民家の風俗を目撃せざりしは遺憾なりとす。 * (下線は筆者)

上記は対馬の報告書であり、その気質・宗教事情・風景・産業の概観を提示している。サツマイモを「孝行芋」と呼ぶことなど地域独自の名称を記述している点も興味深いが、ここで注目したいのは下線部である。円了は、滞在日数不足のため「村落民家の風俗」を探れなかったと嘆いている。ここからは地域観察に強い意欲を持っていたことが読み取れる。

2-5、『日本周遊奇談』にみる地域観察の意図

円了は対馬の報告書《史料12》で地域観察に対する強い意欲を垣間見せた他、地域の特色がよく表れている方言を集めつつ、趣味でもある俗謡のなかに地域の様子を求めるなど各地の特色に強い関心を示していた。この点について考察するため、題にあげた『日本周遊奇談』を確認する。この書籍は、田山花袋の『南船北馬』『日本一周』といった様々な紀行文を刊行してきた博文館から出版されたものである。

さて、その内容だが、円了の口述を筆記したものであり、円了自身が「諧謔」や「酔前茶後（酒前茶後）の一笑話」（思いつくままの軽い笑い話といった意味）と述べ、実際、末尾にトイレットペーパーの代用品の話を書き載せるなど軽い読み物という方向性を有している。ただ、「第十八類 言語文学」で方言、「第十九類 詩謡俗歌」では方言の歌や地域の歌を収録するなど、単なる軽い読み物というものでもない。以下に「緒言」を載せ、円了の狙いを確認する。

《史料13》井上円了「緒言」（『日本周遊奇談』博文館、1911年・明治44）

本書掲ぐる所の数百項の談片は、一場の諧謔にして酔前茶後の一笑話に過ぎず。只余が日本帝国を山阪海隅まで周遊巡了せし記念と

して、地方の実況に付き親しく見聞せる興味ある事項のみを、記憶せる儘に口述し、人をして其一々を筆記せしめたるものなり（中略）其談片はもとより事実談にして、^①決して自ら小説的に作為し、故意に誇張せるにあらずと雖も、実際の伝説其ものゝ針小棒大になりたることなしとせず、又今時の実況にあらずして旧夢に属せしこともあるべし、或は又余の記憶及び聴取の偶然的誤謬も全くなしといふべからず、殊に此の如き伝説は兎角極端又は異例外の事項を唱道する傾向あれば、此奇例を以て一般を推定すること能はず、依りて読書は多少の取捨を用ひて一読あらんことを望む、

②今後、教育の普及と交通の開達とにより、全国の言語、風俗、習慣等の一定すべきは自然の勢いなれば、かくのごとき笑い話が五十年ないし百年後には、あるいは世の考古の参照に資することなしとも計り難しとは、余の空想するところなり。或は又演説講話に興味を添ふる一談柄となることなしといふべからず、

本書は全国周遊の際、面白味を感じたるものゝみを蒐集せしも、別に教育宗教等に関し、真面目なる事項も多々あれば、他日別表題の下に更に編述する心算なり、③又地方の風教に対する学術上の盲評卑見の如きも、他日に譲ることゝなす。 *（下線は筆者）

上記は『南北』の5編と6篇を出す合間、「後期」の講演活動の最中に刊行したものである。円了は編纂方針として、下線部①の通り、聞いた「伝説」（情報）が「針小棒大」である場合や時間経過によって現在は変化している場合、記憶違いなどの発生は許して欲しいと付け加えてはいるが、実際に見聞したものだけを載せたと述べられている。

また、下線部②では2つの事柄について考察する。1つ目は、円了は教育の普及や交通の発展により、地域毎の特色（言語・風俗・習慣など）が薄まり、日本は均質化されていくと考えていた事である。これは修身教育の活動を行っていた円了自身の願望も含まれているのであろう。

2つ目は、将来のため、失われていくはずの地域毎の特色（言語・風俗・習慣など）を記録し、残そうとした事である。円了は日本の均質化を意識しつつも、地方毎の特色を軽んじることなく、その重要性を認識していたと考えられる。その地域毎の特色をなるべく正確に後世へ伝えることを意識している点が、対馬の報告書にあらわれる地域観察への強い意欲の背景に見ることができるといえるだろう。

ただ下線部③のように「風教」（風習）に対する学術上の検討は視野に入れつつも、急ぎ行く訳ではないと述べている。

小括

本章では「後期」の日記の特色について、地域観察という面を意識しながら「前期」の日記と対比しつつ考察した。その結果として以下を提示したい。

先ず、日記の記述姿勢の変化である。「後期」について堀雅通氏が「大学経営の重圧から解放され、自由な身となった」ことで、さまざまな観光行動を行うようになったと指摘されたのは前述の通りである。この観光行動の活発化に加え、妻と旅行したことなど私的な部分も記述するようになってくる。円了が、教育機関を率いる公人としての立場ではなく、私人としての立場も表すようになる点が「後期」の日記の特色であり、興味深い。

また、円了は「前期」から「女子教育」の必要性を訴えていたが、それは「後期」でも婦人団体への講演を行う。あるいは要請されるなど継続していたことも判明した。

東洋大学は、専門学校として初めて女性（栗山津禰）の入学を認めた。それは、円了の晩年である1916（大正5）年であるが、当時の境野黄洋学長は「元来教育は、人格を修養させるのが根本である。人格修養の上には男女の性別を設ける必要がどこにあらう」とのコメントを発したとい

う(20)。学祖である円了は前述のように「女子教育の必要」性を説いており、道徳教育にも熱心であった。退職後も学祖の哲学が連綿と受け継がれていったと考えてみてもよいのではなかろうか。

そしてまた、地域を観察しようとする姿勢が強く表れ始める点も挙げられる。「前期」から七奇・八景を定めているように地域の細かな様子を見てはいるが、それは大型ポンプや巨大な硯といった変わったものの紹介に留まっていた。それが「後期」になると、方言・俗謡(方歌とも)や市町村ごとの産業など、地域の特色を強く意識するようになっていく。その背景には、教育の普及や交通の発展で移動が盛んになるに従って地域色が失われていくことを考え、その地域毎の特色を残そうとする意図があったものと考えられる。

おわりに

本稿では、井上円了に対する理解を深めるという目的のもと、円了の人生で半分近い時間を占めた旅に注目した。円了の旅について三浦節夫氏が哲学館(後に哲学館大学。現、東洋大学)を運営していた「前期」と、退職後に修身教会の活動を本格化させた「後期」に分割できると指摘したのは前述の通りであり、「前期」は教育機関の維持・発展のため、「後期」は修身教会の活動のため、それぞれ義援金を募集していた。この旅について、日記を初めとした諸記録の時期的変化を地域観察という観点から考察し、以下のことが判明した。

それは、旅の日記と報告書の形式及び内容の変化である。「前期」は旅について日記と報告書という2つの形式で情報を発信していた。日記は義援金募集の経過を報告するという面が強く、旅先で見聞したものに關する情報は控えめである。その代わり、報告書のなかで訪問した地域の特色に関する情報・見解を示していた。

但し、報告書が書かれたのは北海道・能登半島・和歌山と奈良南部と

三重の志摩方面の3地域統合および九州の4編と限定的であり、その内容も宗教事情が中心である。宗教は地域の特色という面もあるが、円了の着目姿勢を鑑みるに、別個に扱うべき内容であろう。

「後期」の報告書は、それ単独で出されるものは講演状況と収支報告の2種類となり、地域毎の特色に関しては、一県や複数地域を巡った際にその日記の終わりに報告書形式の文章を載せるようになる。日記は「前期」でも軽く触れていた名所旧跡などへの所感を盛んに記すようになり、自作の漢詩で風景や地域の特色など様々なものを表すようになる。

また、地域の特色について、方言・俗謡・産業など新たな事項も記すようになった。円了は元々俗謡を好んでいたと記しつつ、そこには地域の特色がみえる点も好ましいと記している。そして、滞在日数が少なくその地域の風俗をよく探れなかった際は悔しがるなど、地域の特色を探ることに強い意欲をみせていた。

このような行動の背景として、教育や交通の普及にともなって地域の特色が色あせていくと推察し、将来検討する者のために記録を残そうとしていたことが挙げられる。

また、地域の観察について、「後期」の旅は1906年から始まったが、方言は1907年から見え始め、俗謡は1908年から収録し始める。産業は「後期」直後の1906年から日記中に見え、奈良県吉野の村々について林業が盛んなさまを提示したが、以後、県ごとや複数地域での把握となり、再び市町村ごとに産業について日記に記すのは6年後の1912（大正元）年からである。

この1912年は円了にとって大きな節目でもあった。同年4月に刊行した『南北』6編には、退職後、旅行に専念したことにより心身も回復したので、退職時に目指した読書と文筆活動に力を入れたいと述べている。なおかつ、その3ヶ月後に明治天皇が崩御して大正に改元するが、円了は「大正改元とともに従来の修身教会を国民道徳普及会と改称」（「埼玉

県巡講日誌第一回』『南北』7編)すると宣言した。時代が変化することを意識しつつ、気を引き締め直したのであろう。そのなかで、より一層地域の動きに着目し出したと考えられる。

以上を踏まえ、次の2点を指摘したい。

1 点目は、円了の旅に対する向き合い方の変化である。「前期」は教育機関の維持・発展という目的で義援金を募っている立場にあり、特に開校直後の全国行脚は、教育機関が資金難で傾きかねない状況であった。教育機関のトップとして、支援者に誠意を示すことが肝心であり、旅を楽しむ姿は控える必要があったであろう。次の北陸・近畿巡りでも、初回の能登半島に関する報告書で、休暇を得たので風景を楽しみたいと記しつつ、旅の趣旨は「哲学館および京北中学校拡張の旨趣を報告し広く賛成会員を募集する」《史料4》と宣言しており、実際、日記中に登場する風景への所感も控えめであった。このように「前期」の国内の旅では、各地から義援金を集め、自らが発足させた教育機関を維持・発展させることが主要な課題であった。

それに対して「後期」における旅の目的は道徳を如何にして地域に浸透させていくかという教育にあり、義援金募集はそのための手段であった。そして、教育のためには、地域の状況を把握し、どう教えるべきか勘案する必要がある。その結果、研究者であることもあいまって、必然的に地域それぞれの特色に深い眼差しを向けることになったのだろう。

また、地域の特色を薄れさせていくことに繋がる教育の普及を進めている自身が為すべき使命の一つとして、産業・方言・俗謡といった地域の特色が掴めるものに着目はじめ、それらを記録し、後世に伝えることを意識するに至ったと考えられよう。

2 点目は、円了が実際に日本全国を歩いて廻ったという点である。円了は「前期」の全国行脚で、「暖国」で「気候溫和」の九州は気質が軽薄で虚飾を好むと想像したが実際は質朴であり、それを「あやしみしとこ

ろ」と記した。書物で学び獲得してきた知識⁽²¹⁾と実体験の差異に苦しんだ訳だが、このように僅か30代前半で日本全国を各地の人々と交流しながら巡り、風土の違いを肌で感じ取ったことは、その後の円了にとって得難い経験となったであろう。「後期」の旅では積極的に地域の情報を観察している。これは円了という人物を考える上で重要な点だと考えられる。

今後の課題であるが、円了と同時代の人物たちとの比較研究が重要ではないかと思われる。例えば、1-1の末尾で触れたように、「前期」執筆の報告書「北海道論」は『日本風景論』⁽²²⁾で著名な志賀重昂の存在を念頭に置いていた可能性がある。後に『南北』2編「北海道西北部および北東部紀行」1907(明治40)年9月2日条で「留萌は新開の市街なるも、鉄路の予定地なりとてにわかに繁盛の状を現ぜり。志賀重昂氏もきたりてこの地にあり」と記しているのが興味深い。

また、紀行文という要素を考える際、一例として小説家の田山花袋を挙げることができるだろう。近年、紀行文作家として再評価する向きがあり⁽²³⁾、奇しくも1899年(明治32)に博文館から『南船北馬』という紀行文を出し、後には『日本一周』全三巻を出している。日本全国を巡ったという共通項は重要であるが、花袋の著作は一般読者を意識しているのに対し、円了は地域の情報を残すことその他、講演旅行の記録という面がある。それぞれ目指すものが違うため同一地域の記載を比較するのも興味深いし、こういったことを意識してみることも有益ではないだろうか。

【主要参考文献】

- (1) 佐藤厚「井上円了の沖縄巡講—巡講の内容と筆禍事件—」(『井上円了センター年報』24、2016年)、佐藤厚「井上円了の鹿児島巡講—新聞記事の調査を通して—」(『井上円了センター年報』25、2017年)など。

- (2) 出野尚紀「『群馬県第一回巡講日誌』註解」(『井上円了センター年報』25、2017年)、出野尚紀「『群馬県第二回巡講日誌』註解」(『井上円了センター年報』26、2017年)、出野尚紀「『伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌』「下総銚子紀行 付還曆記事」註解」(『井上円了センター年報』27、2019年)など。
- (3) 堀雅通「旅行記にみる井上円了の観光行動」(『国際井上円了研究』4、2016年)など。
- (4) 三浦節夫「井上円了の全国巡講」(『井上円了選集』15、1998年)。
- (5) 堀雅通「『南船北馬集 第一編』にみる井上円了の観光行動」(『東洋大学大学院紀要』54、2017年)。
- (6) 瀧田夏樹「井上円了の世界視察」(『井上円了センター年報』9、2000年)。
- (7) 堀雅通「円了旅行記にみる酒と温泉」(『井上円了センター年報』29、2021年)。
- (8) 堀雅通「井上甫水著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」(『東洋大学大学院紀要』25、2015年)。
- (9) 三浦節夫「勝海舟と井上円了一勝海舟と福沢諭吉、新島襄との関係と対比させて一」(『井上円了センター年報』7、1998年)。
- (10) 出野尚紀「最初期の館主巡講について一静岡県巡講の詳解一」(『井上円了センター年報』30、2022年)。
- (11) 堀雅通「『館主巡回日記』にみる井上円了の観光行動」(『東洋大学大学院紀要』53、2016年)。
- (12) 『志賀重昂全集』3巻(志賀重昂全集刊行会、1927年)。これに収録された『南洋時事附録』の「緒言」に1889年(明治22)6月とある。
- (13) 三浦(註4)に同じ。
- (14) 出野尚紀「哲学堂八景」(『井上円了センター年報』20、2011年)。
- (15) 井上円了「明治十八年以後の略歴および備忘録」(『南船北馬集』第6編、修身教会拡張事務所、1912年)。『井上円了選集』14巻に収録。
- (16) 堀雅通「井上円了の外客誘致策一「強兵策」からのアプローチ一」(『観光学研究』東洋大学国際観光学部21、2022年)。
- (17) 堀雅通「井上甫水著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」(『東洋大学大学院紀要』25号、2015年)。
- (18) 朝倉輝一「井上円了の修身教会活動」(『東洋法学』57—3、2014年)、同「井上円了の後期の思想について一修身教会活動との関係から一」(『国際井上円了研究』3、2015)。
- (19) 堀(註5)に同じ。

(20) 富士原雅弘「旧制大学における女性受講者の受容とその展開 ―戦前大学教育の一側面―」（『教育学雑誌』32、1998年）。また、野溝七生「文化学科・哲学を志して」（『東洋大学史紀要』1、1983年）、上原恒治「大正期の学園」（『東洋大学史紀要』1、1983年）、総務部広報課編「Play Back vol. 24 ―日本初の男女共学の道を拓く 東洋大学初の女子学生―」（『東洋大学報』246、2016年）。

(21) 円了は長岡洋学校で英語を学ぶ際の教材として、アメリカの地理学者サミュエル・オーガスタス・ミッチェル（1792—1868）の地理書を読んだことが土田隆夫氏の研究で判明した。この地理書は「日本の植物学の父」とも呼ばれる牧野富太郎も読み、慶応義塾の学生が英語を教える際に盛んに用いた他、1872（明治5）年頃から翻訳版が出回り始め、広く普及したものと今井典子氏が指摘している。

その内容について国立国会図書館デジタルアーカイブで確認したところ、1887年に辻本尚書堂から刊行された『地理書直訳』という版の「気候及び産物」という項目に「熱帯ノ気候ハ人間ヲシテ孱属（せんじゃく）ニ而シテ薄弱ニナス而シテ緩慢ナル風習ヲ生セシム」とある。「孱属」は弱々しいことの意である。また、1873年に『大地理書直訳、卷之1』という名称で有志が刊行した版では「帯」という項目で「熱帯ノ住人ハ（中略）心ノ癖ニ於テ不精テ有ル（中略）働キヲ面倒ニ為ス」とある。そして「温帯ノ住人」について何れも、体格も風貌も知恵も全て優れているといった内容が書かれている。

円了は以上に影響されて「暖国」で「気候温和」な九州を「熱帯」寄りとみて、軽薄で虚飾を好むと想像したのかもしれない。

以下参考論文。

土田隆夫「井上圓了の長岡時代 ―長岡洋学校時代に視点をおいて―」（『井上円了センター年報』18、2009年）。

今井典子「明治初期における英語カタカナ表記の発音について」（『国際社会文化研究』高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科14、2013年）。

(22) 1894年（明治27）に政教社から刊行。

(23) 光石亜由美「紀行文作家・田山花袋 ―明治期、奈良への旅を中心に―」（『奈良大学紀要』39、2011年）。

※井上円了の著作については、「はじめに」の末尾および第1章・第2章の冒頭でまとめている。そちらを参照願いたい。